

アジアゾウにおける右前肢の治療と経過過程

寺原三千男, ○落合晋作, 橋口泰志, 松元悠一郎
桜井普子, 玉井勘次, 伊藤ななお
(鹿児島市平川動物公園)

平成 25 年 6 月 26 日に、推定 38 オメス個体において右前肢第四指爪基部の皮膚の一部に剥離が認められ、6 月 28 日には剥離部付近の爪内部より膿様物が漏出していた。血液検査と併せて、オキシテトラサイクリン乳房注入剤（以下 OTC 注入剤）による患部への塗布及び塩酸シプロフロキサシン（シプロフロキサシン錠 200 mg：田辺製薬, 19600 mg/日/頭）の経口投薬を 5 日間実施し、投薬終了後も患部の改善を図るため洗浄と OTC 注入剤の塗布、爪のトリミングを随時実施した。飼育環境については、土の放飼場を使用せずコンクリートの放飼場のみで展示を行い、寝室内での水浴びを実施し患部への汚染が最小限になるよう努めた。しかし膿様物の漏出が改善されなかったため、8 月 25 日に患部下部の爪を削蹄し内部の状況を確認した。結果、膿様物漏出下部に壊死組織を確認し、以降は毎朝夕の壊死組織の切除とイソジンでの消毒に処置を変更した。9 月 4 日には血液検査結果から白血球数の上昇 ($11000/\mu\text{l}$ → $16600/\mu\text{l}$) が認められたため、ノルフロキサシン（キサフロール錠 200：沢井製薬, 19600 mg/日/頭）の経口投薬を実施した。9 月 14 日には患部の熱感と底部にかけて壊死組織の瘻管形成が認められたため、患部に対して垂直に大幅な削蹄を実施し壊死組織を除去した。9 月 18 日から 12 月 18 日まで 3%ポピドンヨードでの蹄浴と蜂蜜の塗布を行ったところ、患部の腫脹の進行が緩和され爪の再生も認められた。外見上完治したと判断していたが、平成 26 年 5 月に爪表面にピンホールを確認し、壊死組織の残存により瘻管形成したと判断し削蹄により患部を開放状態とした。その後はトリミングのみの日常管理で経過観察している。今後は初期治療での壊死組織の完全除去を目指した削蹄手法や器具選定、トレーニングの検討が必要と考えている。